



3.中村月嶺「富士山北口全図」（裏面） 個人蔵
明治35年（1902）6月1日～同年10月1日カ
縦37.6cm×横50.2cm

13頁図B（No. 2）と同様、福地村（現富士吉田市の一部、吉田町を含む）の村長を務めた山口佐重郎の子孫宅に伝わるもので、絵図の内容も図Bと同一。裏面に「富士登山会絵図」と記されている。明治35年（1902）8月に吉田口から富士登山を行った読売新聞社の「学生富士登山会」（13頁参照）と関連する資料の可能性はある。

企画展『「富士山北口全図」—近代のガイドマップに描かれていた世界遺産』展示資料

No.	資料名	年代	所蔵者	掲載頁 (表紙除く初出)
1	中村月嶺「富士山北口全図」	大正8年(1919)	個人	3
2	中村月嶺「富士山北口全図」	明治35年(1902)カ	個人	13
3	中村月嶺「富士山北口全図」	明治35年(1902)カ	個人	裏表紙
4	今井芳男「富士吉田口全図」	明治44年(1911)	ふじさんミュージアム	15
5	若月喜作「富士吉田口全図」	大正6年(1917)	個人	15
6	金子百太郎「富士山北口全図」	大正10年(1921)	ふじさんミュージアム	16
7	金子百太郎「富士山北口全図」	大正12年(1923)	個人	16
8	渡邊嘉十郎「富士吉田口全図」	大正13年(1924)	個人	17
9	中村月嶺「富士山北口全図」	昭和3年(1928)	ふじさんミュージアム	17
10	錠屋商店「富士吉田口全図」	昭和5年(1930)	ふじさんミュージアム	20
11	山梨県富士上吉田町 案内会「富士吉田口全図」	昭和23年(1948)	個人	21
12	金子常光「富士山北口図絵」	大正12年(1923)	個人	18～19
13	金子常光「富士登山と五湖めぐり」	昭和2年(1927)	個人	18～19
14	富士山麓電気鉄道「国立公園 富士五湖」	昭和9年(1934)以降	個人	18～19

パネルによる展示

15	中村月嶺「富士山北口全図」	明治34年(1901)	豊島区立郷土資料館	6～7
----	---------------	-------------	-----------	-----

山梨県立富士山世界遺産センター 令和8年度 第1回企画展 展示解説

「富士山北口全図」—近代のガイドマップに描かれていた世界遺産

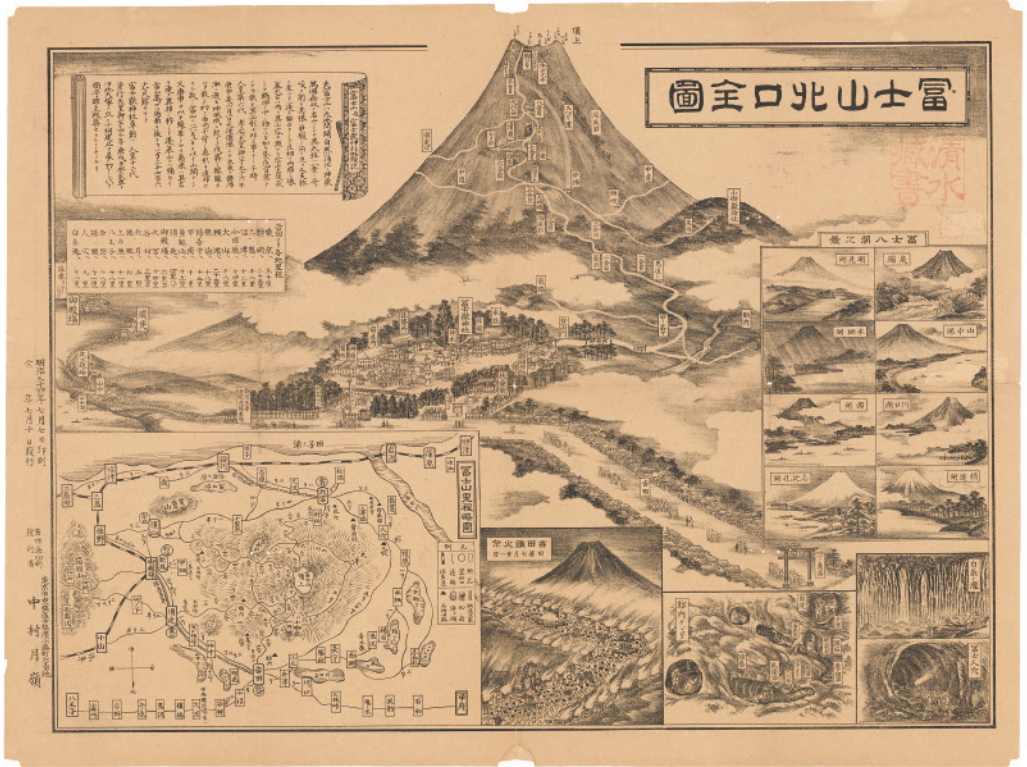
協力者(順不同)
小澤輝展 山口信太郎 小山町立図書館 静岡県富士山世界遺産センター
信州大学附属図書館 豊島区立郷土資料館 ふじさんミュージアム 山梨県立博物館

本誌は企画展「『富士山北口全図』—近代のガイドマップに描かれていた世界遺産」(令和8年7月24日～9月23日)の概要を紹介した展示解説です。展示品以外の資料や景観などについても写真を掲載しています。
執筆・編集は、当センター調査研究スタッフ(千原鴻志・古屋祥子)が担当しました。

令和8年(2026)7月24日発行
編集・発行 山梨県立富士山世界遺産センター
〒401-0301
山梨県南都留郡富士河口湖町船津6663-1
TEL 0555-72-2314
印刷 株式会社 少國民社
〒400-0851
山梨県甲府市住吉1-13-1
TEL 055-226-2125

令和8年度 第1回企画展 展示解説

「富士山北口全図」
—近代のガイドマップに描かれていた世界遺産



山梨県立富士山世界遺産センター

山梨県立富士山世界遺産センターは平成28年（2016）6月に開館し、今年度で10周年という節目の年を迎えます。この間、当センターでは平成25年（2013）に世界文化遺産として登録された「富士山－信仰の対象と芸術の源泉」についての調査研究や情報発信を進めてまいりました。

富士山は古くから霊山として崇められ、多くの人々が山頂に参詣（登拝）し、周辺の湖沼や溶岩洞穴で修行しました。世界遺産・富士山においては、各所からの登山道のほか、山麓の浅間神社、湖沼や滝など、富士山へ参詣に来た人々が訪問した場所の多くが構成資産・構成要素に登録されています。

しかしながら現在では、富士山の形状や自然が注目されることはあっても、信仰の対象としての側面が意識されることは多くありません。

一方、本展で扱う近代（明治時代～昭和時代前半）は、富士講など信仰目的の旅行が盛んだった一方で、景色や自然といった信仰以外の目的の旅行が共存していた時代でした。このうち、後者の人々はどの程度、富士山が信仰の山であることを意識していたのでしょうか？

この問いに答えるため、本展では近代に使用されたガイドマップである「富士山北口全図」に注目しました。「富士山北口全図」は明治34年（1901）初版のガイドマップで、類似するものは昭和23年（1948）頃まで繰り返し発行され続けていました。内容を見ると、吉田口登山道を中心に富士信仰にかかわる神社や湖沼、洞穴、滝など世界遺産・富士山の構成資産・構成要素になったものが多く紹介されています。これらの絵図を利用した当時の旅行者は、富士山を信仰の対象として認識していたのかもしれません。

本展では、「富士山北口全図」とその後に発行された似通った絵図の歴史を紹介し、その現代的意義について考えてみたいと思います。

令和8年（2026）7月
山梨県立富士山世界遺産センター

※本誌において、作者名を冠さずに「富士山北口全図」とする場合は中村月嶺が作者であるものを指しています。

<目次>

- 1 ガイドマップに描かれていた世界遺産・富士山 3
「富士山北口全図」は近代に発行された富士山北面を紹介したガイドマップです。
そこで描かれた名所は、平成25年（2013）に登録された世界遺産・富士山の構成資産になっています。
- 2 中村月嶺と「富士山北口全図」の成立 6
明治34年（1901）に初版が発行された「富士山北口全図」。その作者である中村月嶺の動向を探ることで、このガイドマップが富士講の考え方を反映したものであることを論証します。
- 3 北口全図型案内図の展開 14
中村による「富士山北口全図」は、多くの類似する構図の案内図を生み出しました。それら「北口全図型案内図」は中村式、今井式、金子式の三種類に分類できます。それぞれの概要と特徴を紹介し、北口全図型案内図が約半世紀にわたるロングセラーであったことを説明します。
- 4 北口全図型案内図の終焉 18
1920年代になると、北口全図型案内図とは異なる新しい構図の鳥瞰図が現れます。これらは、当時山梨県が進めていた富士北麓の観光開発の影響を受けたものでした。北口全図型案内図もまた、観光開発の影響を受けて変容しますが、1940年代を最後に姿を消します。

表紙の写真

上：15. 中村月嶺「富士山北口全図」/明治34年（1901）/豊島区立郷土資料館蔵

下：11. 山梨県富士上吉田町 案内会「富士吉田口全図」/昭和23年（1948）/個人蔵

1 ガイドマップに描かれていた世界遺産・富士山

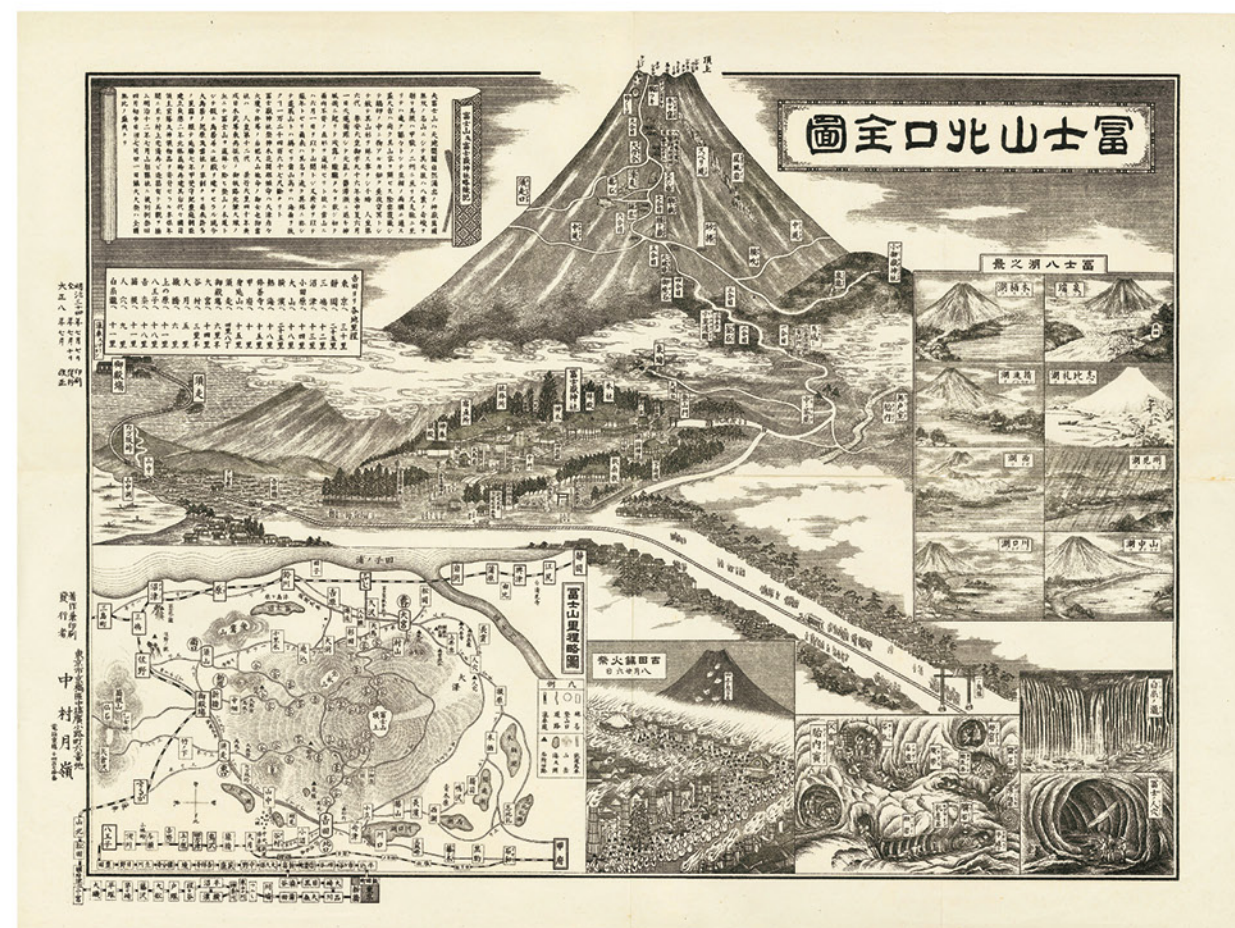
「富士山北口全図」

古くから信仰の対象として多くの参詣者を集めた富士山では、江戸時代から各登山口で木版の案内図（ガイドマップ）が作成されるようになった。

一方、明治時代になると、全国の景勝地や社寺、温泉地などで銅版または石版印刷による精緻な描写の鳥瞰図（真景図）が多数出版された（真景図については中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験』を参照）。これらの影響を受けて富士山で登場したのが中村月嶺「富士山北口全図」だったと考えられる。

「富士山北口全図」は富士山北面を中心に紹介した案内図で、吉田口登山道や富士嶽神社（現・北口本宮富士浅間神社）が詳細に描かれるほか、富士八湖など周辺の名所も紹介しており、今日のガイドブックを想起させるものである。最も古いものは明治34年（1901）に作成されたもので、その後、作者や表題、内容を変えて似通ったものが繰り返し発行された。

「富士山北口全図」とそれに続く絵図は、富士山の案内図を紹介する際にしばしば取り上げられてきた。しかしながら、その成立から終焉に至るまでの歴史については未だに整理されていない。そこで、本企画展では、これらの絵図の中でも代表的なものを紹介するとともに、その成立に至る経緯や、改正・改変されていた過程を明らかにする。



1. 中村月嶺「富士山北口全図」

明治34年（1901）7月7日印刷 同年7月10日発行 大正8年（1919）7月改正

個人蔵

縦39.6cm×横52.9cm

「富士山北口全図」が紹介した世界遺産・富士山

※世界遺産の構成資産・構成要素の名称については番号とともに赤字で記載した。



ス パシグチ
「須走口」
すばしりぐち
1-4 須走口登山道



富士山頂
1-1 山頂の信仰遺跡群



コムロ センダン
「小室浅間」
おむろせんげん
8 富士御室浅間神社
吉田口登山道の二合目（図中では「二合五勺」）に本殿があった。



つまがし
馬返
1-5 吉田口登山道

「富士嶽神社」

せんげん
1-6 北口本宮富士浅間神社

吉田口登山道のスタート地点となった神社。富士講の奉納物が多数のこる。



吉田町

おし
9-10 御師住宅

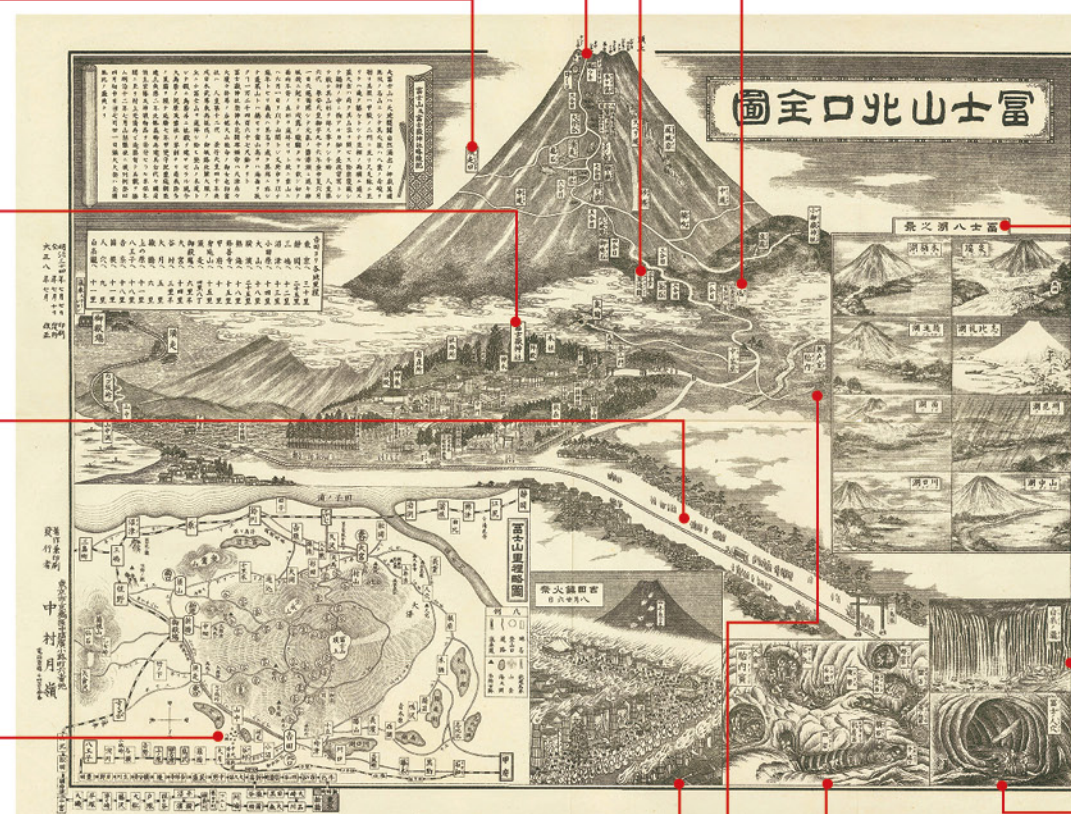
現在の富士吉田市上吉田。富士講は、この町の御師のもとで一泊し、富士山頂を目指した。



「八湖」

おしの はっかい
13 ~ 20 忍野八海

19世紀に富士講により霊場として整備された（写真は菖蒲池）。



1.中村月嶺「富士山北口全図」 個人蔵
明治34年（1901）初版
大正8年（1919）改正

「富士山北口全図」は明治34年（1901）初版の富士山北面を描いたガイドマップで、その後も繰り返し改正版が発行された。本図が作られた時代、東京周辺には富士山を信仰する人々の団体である富士講が多く存在した。富士講は富士山頂へ参詣（登拝）したほか、周辺の洞穴や湖沼などでも修行した。本図が紹介している場所の多くは富士講の訪問先である。

さて、富士山は平成25年（2013）に世界遺産「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」に登録された。その構成資産・構成要素のうち、富士信仰にかかわりのある場所の多くが「富士山北口全図」で紹介されている。

つまり、100年以上前の富士山北面の信仰世界を描いた「富士山北口全図」は、結果的に現代の世界遺産・富士山を紹介しているのである。

「吉田鎮火祭」（吉田の火祭）

吉田町の北口本宮富士浅間神社と諏訪神社で毎年8月26日、27日に行われる祭事（左は2023年、右は2025年）。



「富士八湖」

富士講は富士山麓の八つの湖沼を巡る修行（内八海巡）を実施していた。



モトス コ
「本栖湖」 1-9 本栖湖



セン ズイ
「泉瑞」



ショウ シン コ
「精進湖」 1-8 精進湖



シ ヒ レ コ
「志比礼湖」（四尾連湖）



セイ コ
「西湖」 1-7 西湖



アケ ミ コ
「明見湖」（明見湖）



カハグチ コ
「川口湖」 12 河口湖



ヤマナカ コ
「山中湖」 11 山中湖

「白糸ノ瀧」

24 白糸ノ瀧

白糸ノ瀧、人穴富士講遺跡、船津胎内樹型はいずれも富士講の修行の場であった。



フジノヒト アナ
「富士人穴」

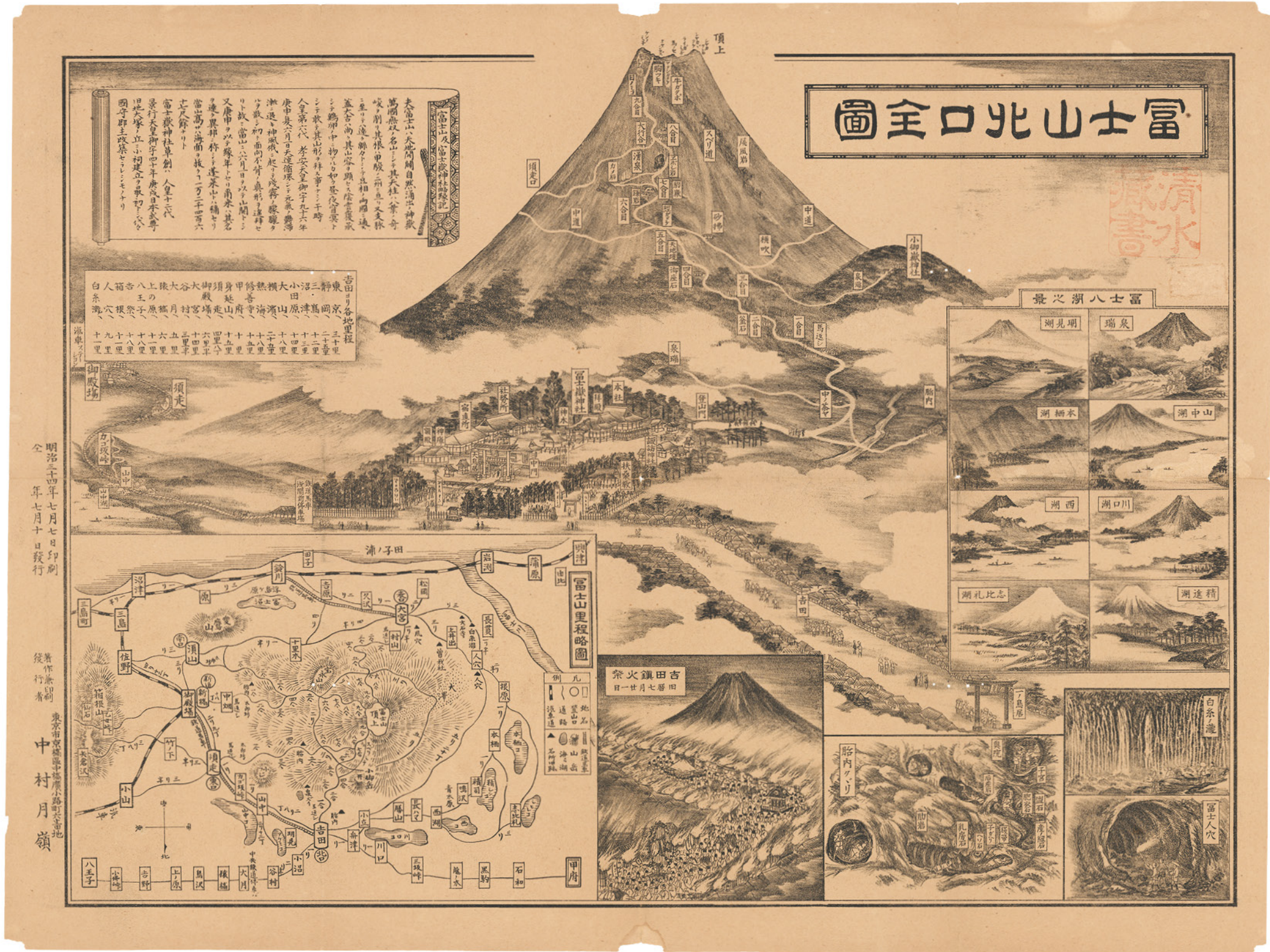
フナツ タイネイ ジョウゲイ
21 船津胎内樹型



23 人穴富士講遺跡

2 中村月嶺と「富士山北口全図」の成立

中村月嶺「富士山北口全図」(明治34/1901年)



15.中村月嶺「富士山北口全図」
明治34年(1901)7月7日印刷 同年7月10日発行
豊島区立郷土資料館蔵
縦38.0cm×横50.6cm
現存する「富士山北口全図」とそれに似通った絵図の中で最も古いものと推定される(12頁参照)。

「富士山北口全図」の作者・中村月嶺：銅版画家の富士講員

銅版画家としての中村月嶺

中村月嶺（1846－1922、図1）は明治・大正時代の東京で活躍した銅版画家・石版画家である。柳田龍雪から銅版画の技法を学び、柳田とともに紙幣寮（現・国立印刷局）に出仕し「鳥切手」など手彫り切手を制作している。退職後は、銅版・石版の印刷所である晴雲閣を京橋（現・東京都中央区）で開業し、大正11年（1922）に76歳で亡くなるまで、書籍の挿絵からガイドマップに至るまで多くの作品をのこした（中村については、小野忠重『日本の銅版画と石版画』を参照）。



図1 中村月嶺

出典：成瀬麟・土屋周太郎 編
『大日本人物誌 一名・現代人名辞書』
（八紘社、大正2/1913年）81頁

富士講・明輝講の講員としての中村月嶺

その一方で、中村月嶺は富士講の講員でもあったと考えられる。それを示しているのが、富士山吉田口登山道七合目の鳥居荘旧蔵のマネギ（図2）である。マネギ（マネキ、招）とは、富士講や個人の名称を記した旗板・紙のことで、御師や山小屋等に奉納された。鳥居荘に伝わった明輝講のマネギには「中村月嶺」の名前が確認できる。明治41年（1908）に、たばこ屋（吉田口五合目）へ奉納されたマネギ（『富士吉田の富士山信仰用具調査報告書』第2分冊、No.696）には「京ばし 明輝講」とあり、明輝講は京橋の富士講であったことがわかる。前述した通り京橋には中村の印刷所である晴雲閣があり、中村は京橋の住民として明輝講に参加していたと考えられる。



図2 明輝講のマネギ

ふじさんミュージアム蔵
重要有形民俗文化財
『富士吉田の富士山信仰用具調査報告書』
第2分冊No.1700

御師の仕事を受けていた中村月嶺

中村月嶺の作品には富士山北面の御師や神社に関連した印刷物も含まれている（表1、図3～5）。その一つが、「小御岳石尊 磐長姫命」の御影（図3）である。御影とは神仏の木像や画像のことで、本資料では小御岳（現・富士スバルライン五合目）で祀られた天狗を描いている。本作品の「印刷者」は中村月嶺だが、「発行所」は田辺次寸となっている。田辺は屋号を「大国屋」とする吉田の御師である。大国屋には「陸明輝講」の銘を含む富士講の奉納額（前掲、第1分冊No. 792）が旧蔵されており、中村が属した明輝講を受け入れていた御師だったと考えられる。

田辺次寸は『富士山北口記録』（図5）を著作しているが、これを印刷・発行したのが中村月嶺の晴雲閣である。同書冒頭では富士山の縁起を述べている。中村の「富士山北口全図」にも、同様の内容を記した「富士山及富士嶽神社略縁記」があるが、その文章は『富士山北口記録』冒頭とほぼ同一のものであった。中村は『富士山北口記録』の印刷の仕事を通して、御師である田辺の影響を受けたと考えられる。

「富士山北口全図」の成立背景

以上をまとめると、なぜ「富士山北口全図」が世界遺産・富士山の構成資産・構成要素、つまり北口本宮富士浅間神社や「富士八湖」といった信仰の対象を描いていたのかが見えてくる。作者の中村月嶺は、銅版画家であると同時に、富士講・明輝講の講員だった。そして明輝講で富士登山などをする際、吉田の御師である田辺次寸に世話になり、やがて田辺が携わった御影や書籍の印刷を依頼されるようになったと推定される。中村による「富士山北口全図」は、彼自身の富士講員としての活動や御師との関係の中で成立したと考えるのが自然であり、その結果、同図には富士信仰に関わる場所が主として取りあげられるようになったと考えられる。



図3 御影（小御岳石尊）

ふじさんミュージアム蔵
重要有形民俗文化財
明治32年（1899）6月20日印刷
※『富士吉田の富士山信仰用具調査報告書』第1分冊
No.464

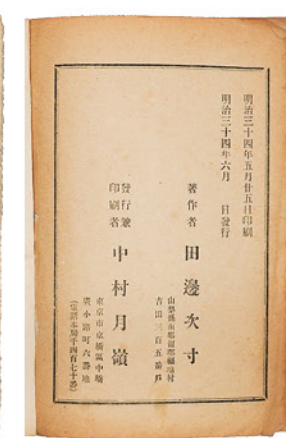


図4 御影（富士行者）

ふじさんミュージアム蔵
重要有形民俗文化財
明治32年（1899）6月20日印刷
※『富士吉田の富士山信仰用具調査報告書』第1分冊
No.461



表紙



奥付け

図5 田辺次寸『富士山北口記録』

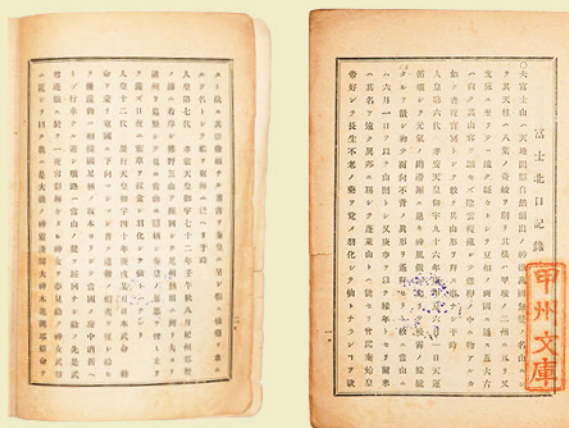
山梨県立博物館蔵
明治34年（1901）5月25日印刷 同年6月発行

表1 中村月嶺が関わった富士山に関する印刷物

	作品名	印刷日	中村月嶺の肩書	著作者・発行者
図3	御影（小御岳石尊）	明治32年(1899) 6月20日	印刷者	粕俊学（著作兼発行者） 田辺次寸（発行所）
図4	御影（富士行者）	明治32年(1899) 6月20日 大正15年(1926) 7月10日改訂印刷	印刷兼発行者	粕俊学（著作者）
図5	富士山北口記録 （書籍）	明治34年（1901）5月25日	発行兼印刷者	田辺次寸（著作者）
6-7頁	富士山北口全図	明治34年（1901）7月7日	著作兼印刷発行者	中村月嶺

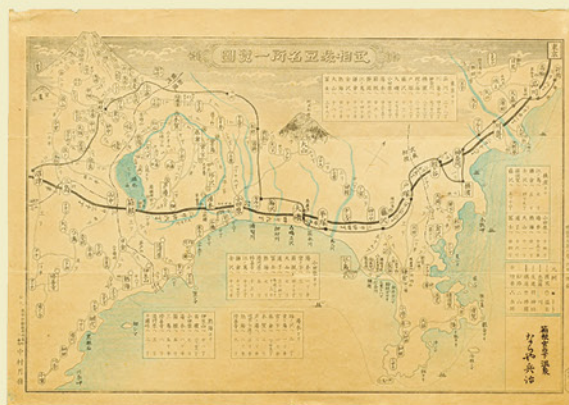
「富士山北口全図」は何を参考にしたのか

作者・中村月嶺の過去作品



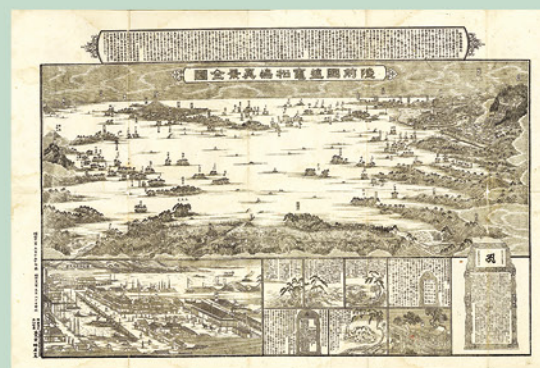
田辺次寸『富士山北口記録』 山梨県立博物館蔵
発行兼印刷者 中村月嶺
明治34年（1901）

「富士山北口全図」左上に巻物の形で掲げられている「富士山及富士嶽神社略縁記」は、中村が印刷した田辺次寸『富士山北口記録』の冒頭部分と内容がほぼ一致する。



中村月嶺「武相駿豆名所一覽図」
明治19年（1886）静岡県富士山世界遺産センター蔵

吉田町から各地への距離の一覧（「吉田より各地里程」）や吉田町周辺の路線図（「富士山里程略図」）には、中村が過去に作成した案内図の影響がみられる。



他名所の案内図

名所を図中ではなく別枠を設けて描くという構図は、同時期の松島などの案内図を参照したと考えられる。

蜂屋十馬「陸前国塩竈松嶋真景全図」
明治28年（1895） 個人蔵

富士山北面の案内図・絵図

上方に富士山、中央に富士嶽神社（現北口本宮富士浅間神社）、下方に吉田町（現富士吉田市上吉田）を配する基本的な構図は、江戸時代～明治時代の富士山北面の案内図を踏襲している。胎内や火祭などの絵もそれ以前の作品の影響がみられる。



「富士山神宮麓八海略絵図」
江戸時代（18世紀後半カ）
個人蔵

中村月嶺と関係があった吉田の御師・大国屋に版木が伝来

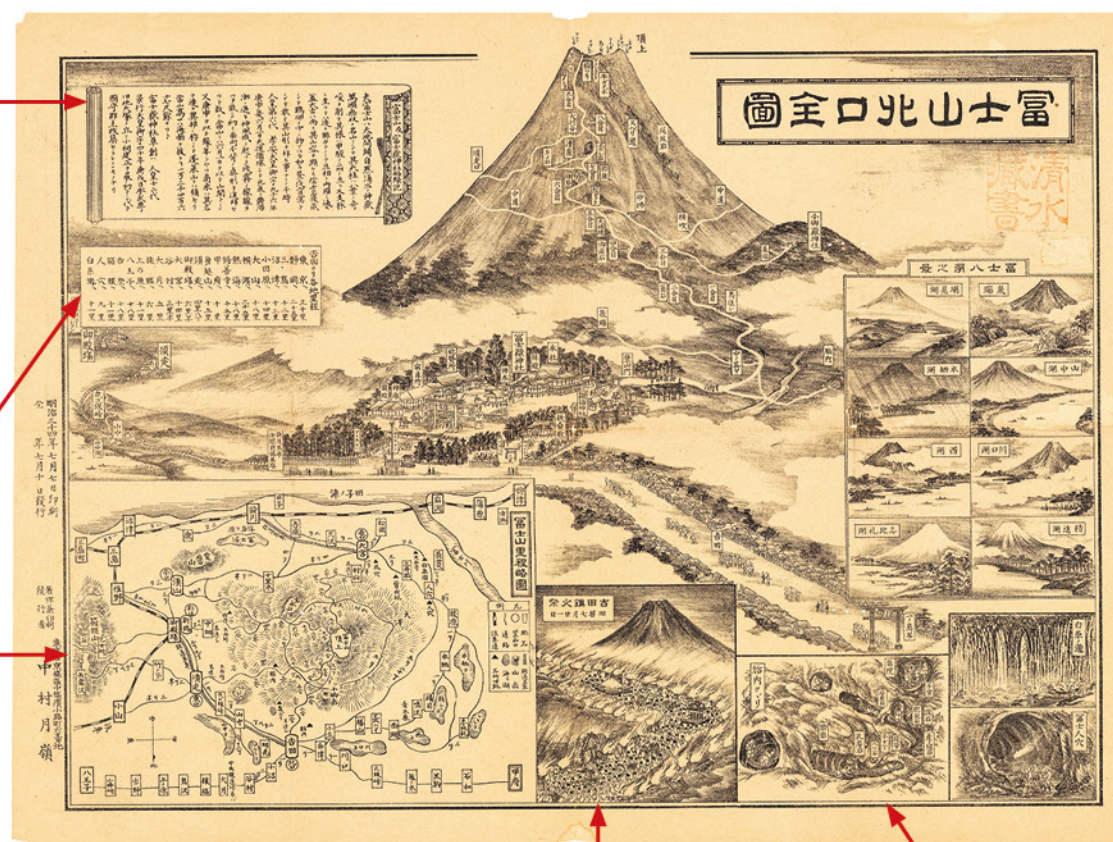


藤原俊成
「富士山神宮并麓八海略絵図」
江戸時代（18世紀後半以降）
ふじさんミュージアム蔵

青山豊太郎
「富士山北口本宮
富士嶽神社境内全図」
明治25年（1892）
ふじさんミュージアム蔵



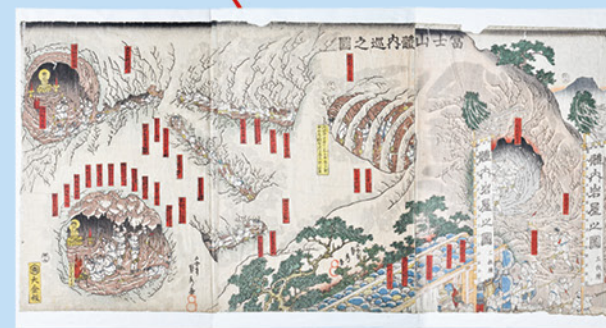
五雲亭貞秀
「富士山体内巡之図」
安政5年（1858）
小山町立図書館蔵



15. 中村月嶺「富士山北口全図」
明治34年（1901）
豊島区立郷土資料館蔵



村上奉一
「富士山北口全図
鎮火大祭」
明治30年（1897）
山梨県立博物館蔵

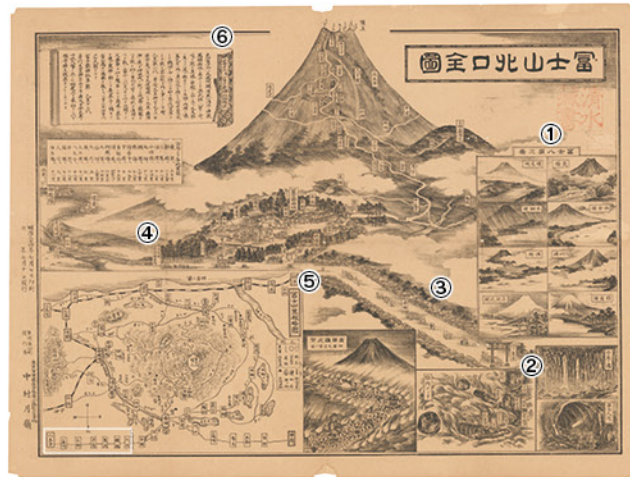


「富士山北口全図」の改正と受容

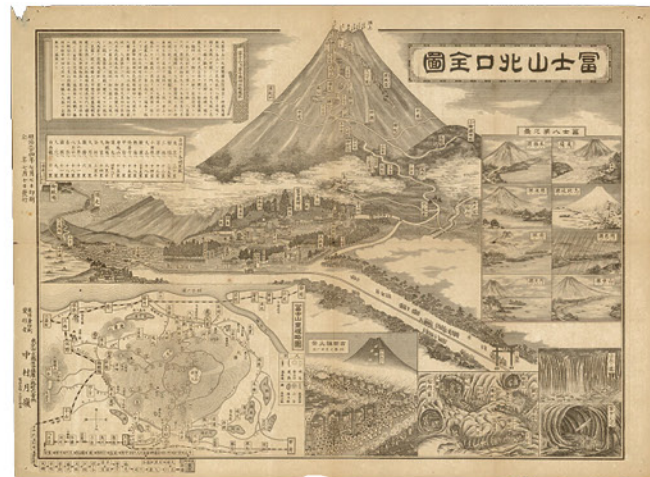
改正された「富士山北口全図」

現存する「富士山北口全図」のうち、最古のものは「明治三十四年七月七日印刷 同年七月十日発行」と記載されたものである。しかし、これと同一の日付で内容が異なるものが三種類（図A～C）確認され、短期間で改正が繰り返されたと考えられる。

改正の背景には中村自身の富士山への認識の変化に加え、中央線（大月駅開業は明治35 / 1902年）や大月―御殿場間の馬車鉄道（全区間開通は明治36年）など交通機関の整備も影響した可能性がある。



図A 15.中村月嶺「富士山北口全図」
豊島区立郷土資料館蔵
明治34年（1901）7月7日印刷 同年7月10日発行



図C 中村月嶺「富士山北口全図」信州大学附属図書館蔵
明治36年（1903）以降 縦37.8 cm×横51.0 cm

<図Aと図Cの内容面の主な相違点>

- ①「富士八湖之景」の配置と内容の変化。特に図Aでは明見湖（上端左）に富士山が描かれているが、図Cでは实景に合わせたのか、富士山の代わりに雨が描かれる（図C上から3番目、右）。
- ②「胎内竇（たいないくぐり）」の構図の変更。図Aの「奥院」「子宮」が図Cでは「父窟（チチノタイナイ）」になるなど説明も変更。
- ③図Cでは、吉田町の中央に馬車鉄道が加筆（吉田町の馬車鉄道は明治33年に開通）。
- ④「鉄道馬車浅間前停車場」が図Cでは図Aより西に描かれている。
- ⑤周辺の路線図「富士山里程略図」。図Cでは飯田町（東京）からの中央線が加筆（図c参照）。
- ⑥「富士山及富士山略縁記」の文章量が図Cの方が多い。

<「富士山北口全図」(図A～図C)の作成年の推定>

図A～図Cは全て左端に「明治三十四年七月七日印刷 同年七月十日発行」と記載されているが、各図の作成年は異なり、図A→図B→図Cの順で改正されたと考えられる。

図A：記載通り明治34年（1901）7月7日印刷、同年7月10日発行

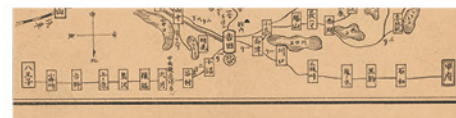
理由：左下の「富士山里程略図」に明治34年8月1日に開業した八王子―上野原間の中央線を示す「汽車道」が図示されていないため（図a）。

図B（13頁）：記載と異なり明治35年（1902）6月1日～同年10月1日に発行

理由：「富士山里程略図」に明治35年6月1日開業の鳥沢駅までの中央線が「汽車道」の記号で示されているが、明治35年10月1日に開業した大月駅までは「汽車道」が伸びていないため（図b）。

図C：記載と異なり明治36年（1903）6月11日以降に発行

理由：「富士山里程略図」に、明治36年6月11日に開業した甲府駅までの中央線が「汽車道」の記号で示されているため（図c）。



図a 図Aの左下端を拡大



図b 図Bの左下端を拡大



図c 図Cの左下端を拡大

登山口で販売された「富士山北口全図」

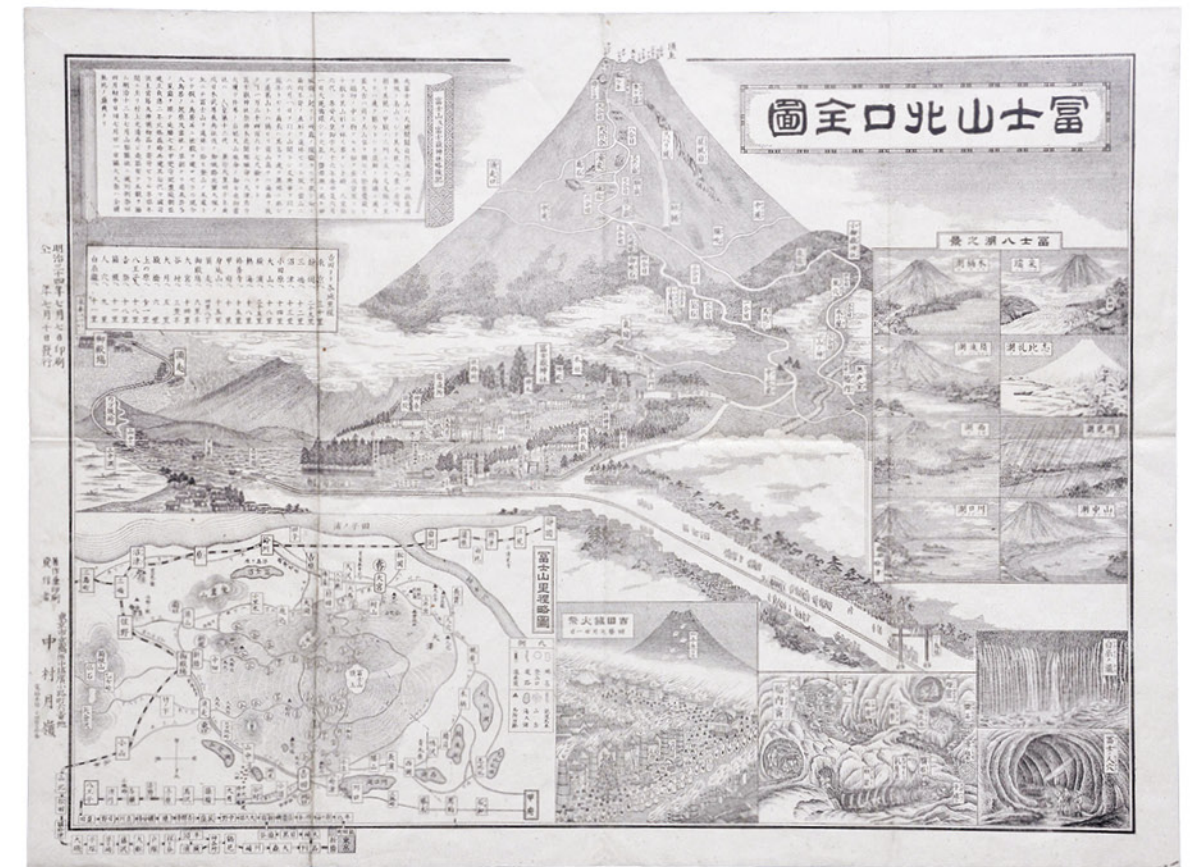
「富士山北口全図」には土産品としての側面があったと考えられる。今津隆治編、小島烏水補『富士山大観』（如山堂、明治40/1907年）は、「富士山の各登山口には、大抵富士何々全図と称する、チヨン鬻流に描ける図を売れり」（130頁）とあり、「富士何々全図」を近代的な測量に基づく地形図と比較して江戸時代以来の「チヨン鬻流の描き方」と評価している。同書の発行年を考えると、ここでの「富士何々全図」が指している案内図には「富士山北口全図」が含まれていると考えられ、同図が吉田口で一般登山者向けに販売されていたことを示唆している。

中村月嶺による新聞社の登山会への配布：一般の登山者への受容

先述したように「富士山北口全図」は作者・中村月嶺の富士講員としての経験を反映して作成されたと考えられる。しかし、中村はこの絵図を富士講員以外の人々にも届けようとしていたと考えられる。

その証拠に、中村は明治35年（1902）とその翌年に、「富士山北口全図」200枚を読売新聞社の「学生富士登山会」に寄付している（読売新聞「富士登山会々報（廿一）」1902年7月31日朝刊、同「富士登山会々報（四）」1903年7月20日朝刊）。「学生富士登山会」は「国民剛健の気風を養成」することを目的に学生を募集し、自然科学の各分野の研究者が同行し、吉田口から登山したものである。読売新聞社の「学生富士登山会」は体力養成や科学的興味を目的としており、富士講の登拝とは異なる近代的な登山であった。

中村は「富士山北口全図」の購買層として、富士講だけでなく、当時増加してきた非宗教的な理由で山岳を楽しむ登山者を想定していたと考えられる。



図B 2.中村月嶺「富士山北口全図」
明治35年（1902）6月1日～同年10月1日 個人蔵
縦37.9cm×横50.2cm

明治35年に読売新聞社が「学生富士登山会」を実施した際に、彼らを歓待した福地村（現富士吉田市、吉田町を含む）村長の山口佐重郎の子孫宅に伝来するもの（裏表紙参照）。内容は図Cと類似するが、河口湖畔の船津から富士山中腹の小御嶽神社に至る船津口登山道が描かれている点が異なっている。

3 北口全図型案内図の展開

北口全図型案内図とその分類

北口全図型案内図

明治34年（1901）に初版が発行された中村月嶺「富士山北口全図」はその後、1940年代まで続々と似通った案内図が制作された。これらは①題名が「富士山北口全図」または「富士吉田口全図」であること、②吉田町（現富士吉田市上吉田）・北口本宮富士浅間神社・富士山を中央に大きく描き、周辺には富士八湖などの名所や吉田の火祭の絵を配するという構図、③「富士山及富士浅間神社略縁記」などの富士山の成り立ちを説明する文章、④「富士山里程略図」などの吉田町周辺の鉄道や道路を示した図、⑤「吉田ヨリ各地里程」と称する各地から吉田町までの距離を示した一覧表といった要素を共通して持っている。以後は「富士山北口全図」とそれに類似する絵図、つまり上記①～⑤の特徴を持つガイドマップを「北口全図型案内図」と称する。「北口全図型案内図」は大きく分けると以下の3種類に分類できる。

（1）中村式

発行期間（推定）：明治34年（1901）～昭和3年（1928）

明治34年（1901）初版の中村月嶺「富士山北口全図」の改正版とその構図を模倣したもの。中央に吉田町を右肩下がり描き、それとは別に右側に富士八湖などの名所や火祭の絵を整然と配置している（17頁）。

（2）今井式

発行期間（推定）：明治44年（1911）～大正6年（1917）

明治44年（1911）発行の今井芳男「富士吉田口全図」を端緒とするもので、大正3年（1914）初版の若月喜作「富士吉田口全図」も含まれる。吉田町を曲線状に描くことで、町の大部分が富士八湖などを描いた絵により覆い隠されるようになった（15頁）。大正6年（1917）までしか確認されず、北口全図型案内図の中では最も短命だったと考えられる。

（3）金子式

発行期間（推定）：大正10年（1921）～昭和23年（1948）

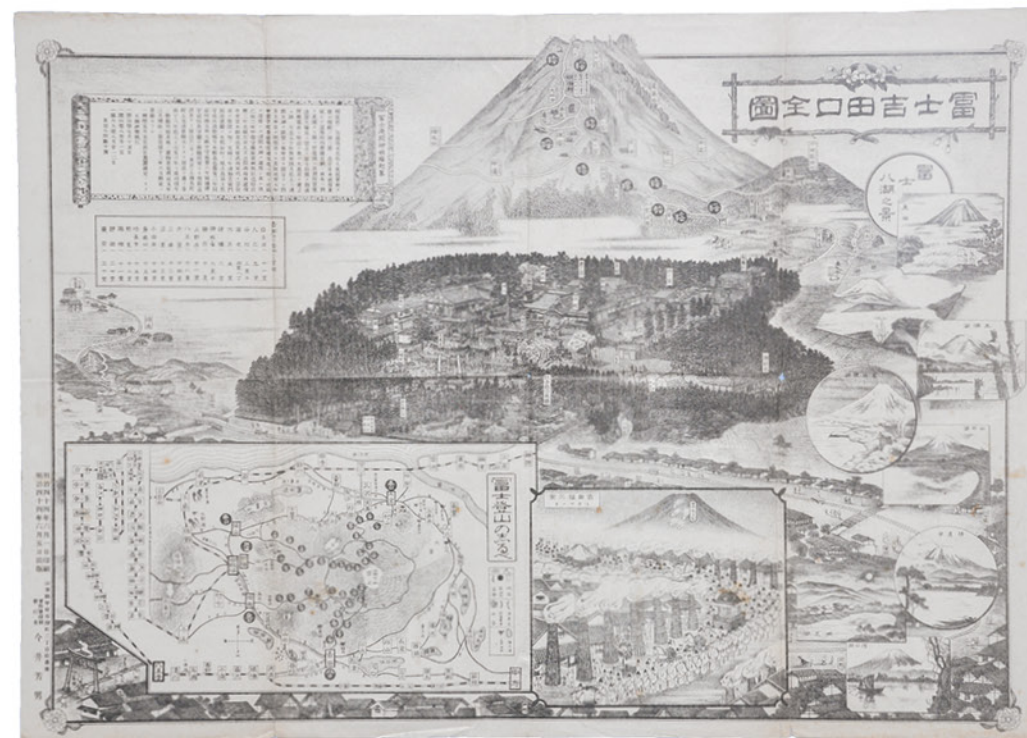
大正10年（1921）発行の金子百太郎「富士山北口全図」（以下「金子図」）を端緒とするもの。中村式や今井式と異なり、吉田町を下から上へ直線状に描き、富士八湖などの名所を同じ絵の中に組み込んでいる（16頁）。これは「富士山神宮麓八海略絵図」（11頁）など江戸時代の絵図の影響とみられる。また、吉田町の御師や旅館の名前を記す点では明治25年（1892）の青山豊太郎「富士山北口本宮富士嶽神社境内全図」（11頁）と類似している。

金子図には発売元として「河津屋本店」の名前が記載される。河津屋は吉田町で登山用品や土産物を販売したほか、それらを御師に納入していた（富士吉田市教育委員会市史編さん室編『上吉田の民俗』、77頁）。金子百太郎は大正12年（1923）まで改正版（16頁下）を発行したほか、発売元の河津屋本店の名前のみが記載された同様の絵図も残っている。また、金子式の北口全図型案内図は、大正堂、錠屋商店などの河津屋以外の吉田町の商店も発行しており（23頁）、土産品として販売されていたと考えられる。金子式で最も新しいものとして昭和23年（1948）のもの（21頁）が確認されている。

ロングセラーとしての北口全図型案内図

以上をまとめると、北口全図型案内図は明治34年（1901）に最初に作成されて以降、10年ごとに今井式、金子式といった新しい型式のものが発行された。特に金子式は1940年代まで確認されるので、北口全図型案内図は約半世紀におよぶロングセラーだったといえる。先述したように、北口全図型案内図には富士講の信仰が色濃く反映されており、それが土産品として富士講以外の人々に販売されていた20世紀前半という時代は、富士山が信仰の山として一般に受け入れられていたと考えられる。

① 1910年代における今井式の登場



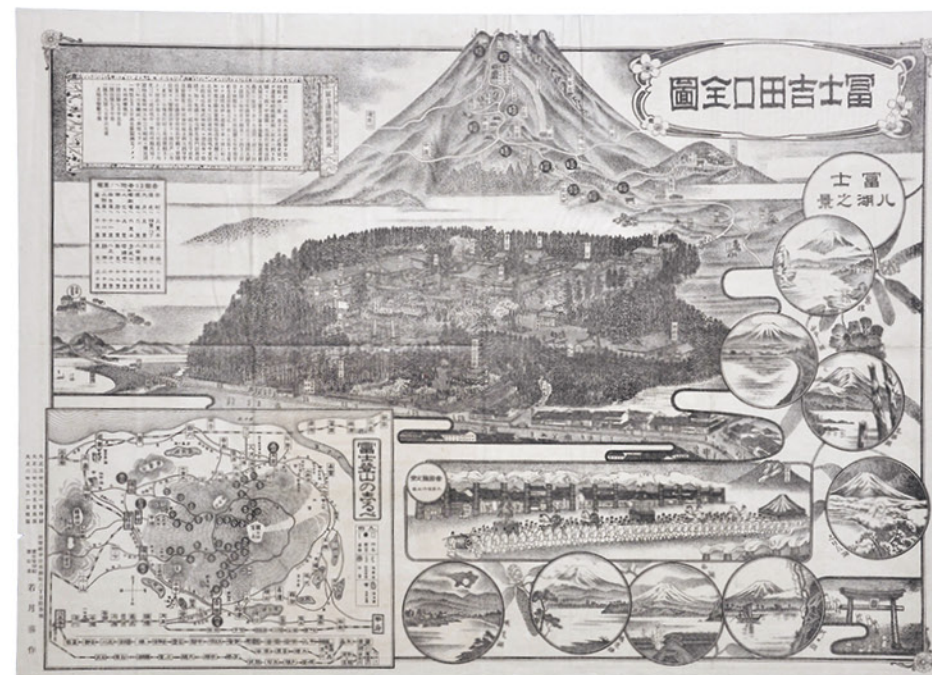
4. 今井芳男「富士吉田口全図」

明治44年（1911）6月1日印刷 同年6月5日出版

本体：縦39.3 cm×横54.5 cm 袋：縦19.7 cm×横14.0 cm

今井式の中で最も古いものと考えられる。今井は明治45年（1912）にも同様の案内図を発行している。

ふじさんミュージアム蔵



5. 若月喜作「富士吉田口全図」

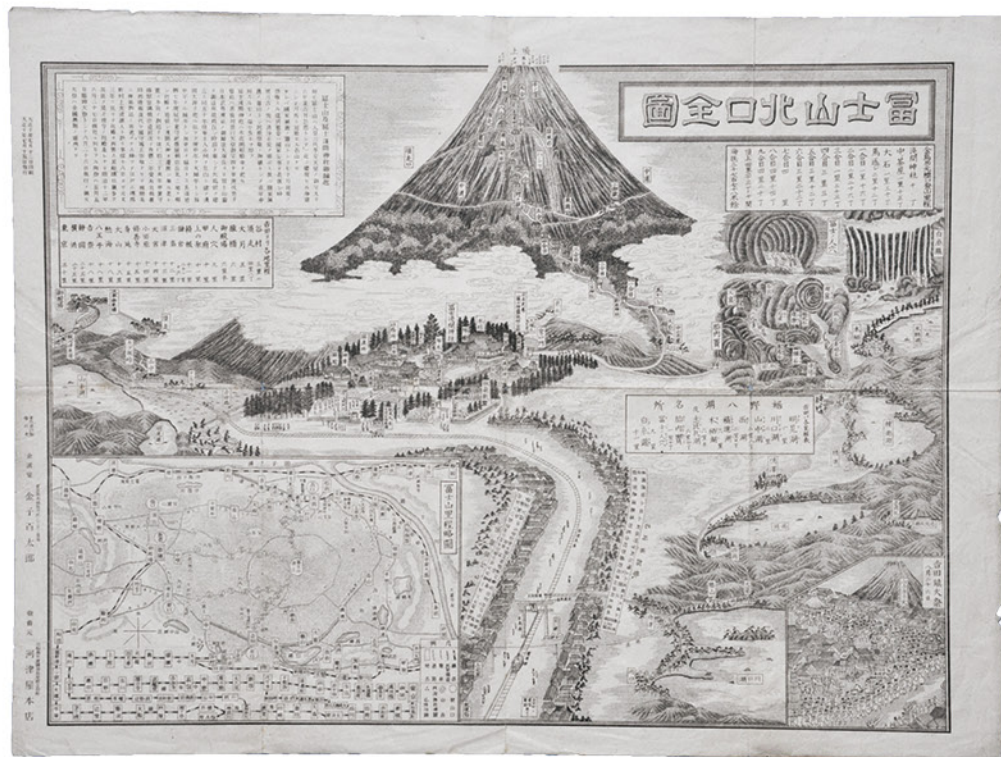
大正3年（1914）7月1日印刷 同年7月5日出版 大正6年（1917）7月1日改版

本体：縦39.2 cm×横53.8 cm 袋：縦19.7 cm×横13.6 cm

全体的には今井芳男の絵図の構図を踏襲しているが、富士八湖や火祭の絵の配置や吉田町の描き方が異なる。著作兼発行者の若月喜作の住所は今井と同じ甲府市柳町2丁目10番地であり、両者の間には何らかの関係があると推定される。袋には「富士浅間神社蔵版」とあり吉田の富士浅間神社（現北口本宮富士浅間神社）が版權を所有していたと考えられる。

個人蔵

1920年代における金子式の登場



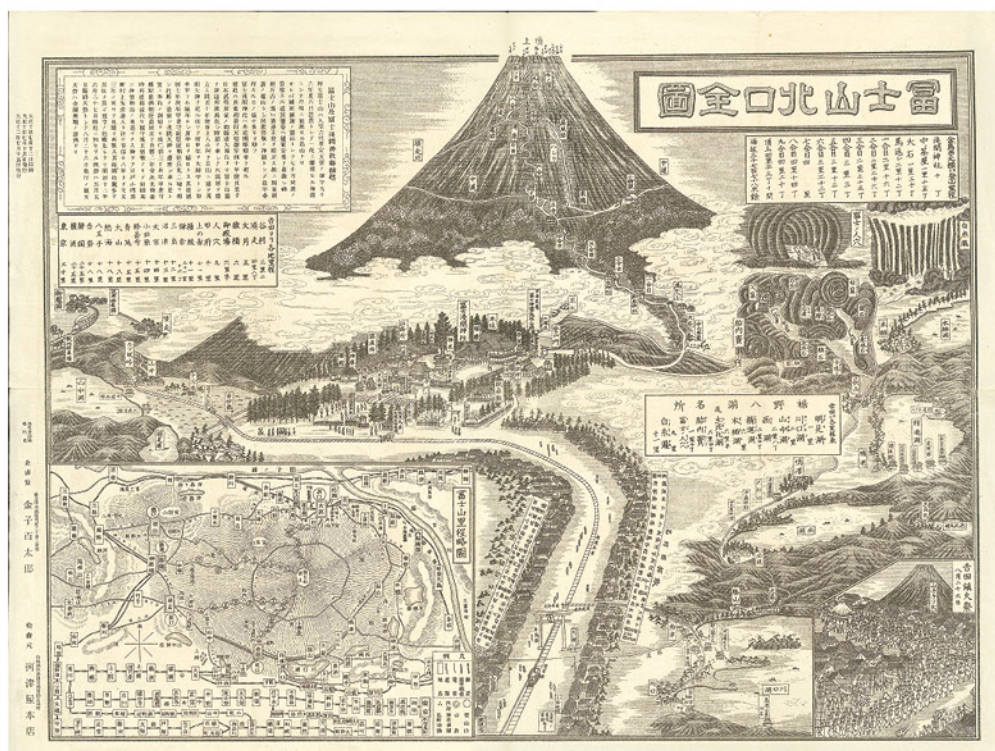
6.金子百太郎「富士山北口全図」

ふじさんミュージアム蔵

大正10年（1921）7月12日印刷 同年7月15日発行

縦38.5 cm×横51.1 cm

「著作兼印刷発行者」として「東京市本郷区弓町二丁目三番地 金清堂 金子百太郎」、「発売元」として「山梨県甲斐国南都留郡吉田町 河津屋本店」とある。



7.金子百太郎「富士山北口全図」

個人蔵

大正10年（1921）7月12日印刷 同年7月15日発行

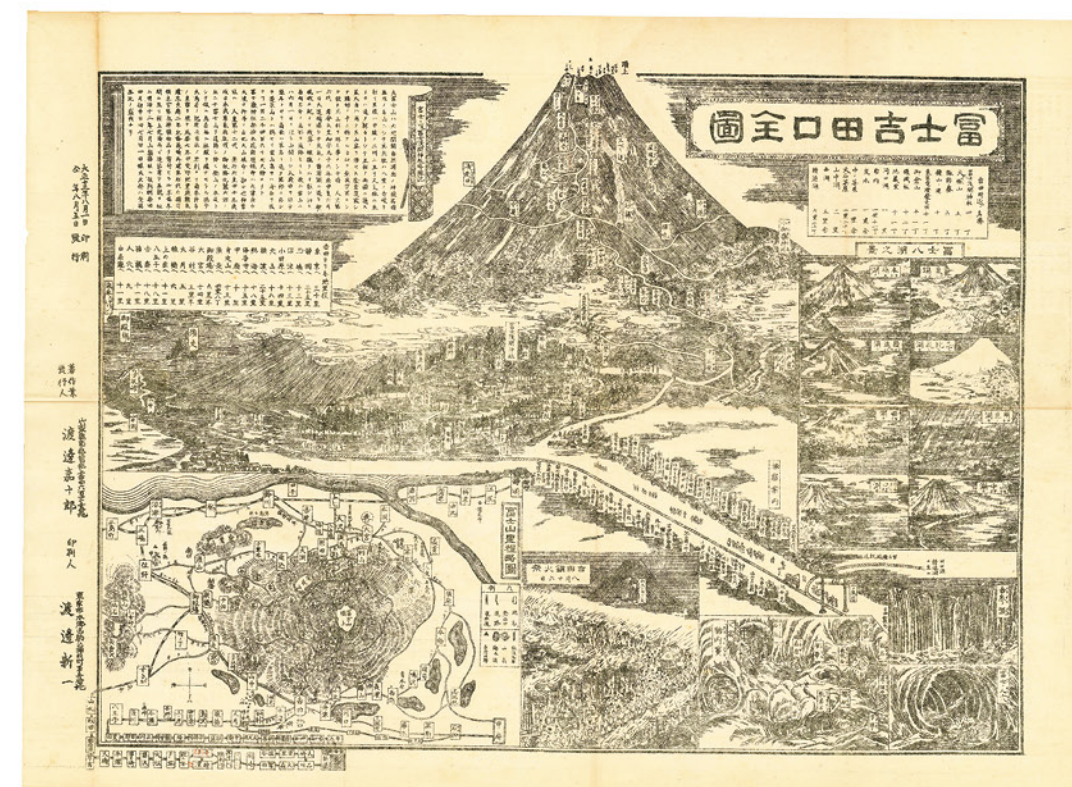
本体：縦37.6 cm×横49.8 cm 袋：縦19.2 cm×横12.8 cm

大正12年（1923）年7月15日発行（改正カ）

河口湖や精進湖などの周辺に宿泊施設の名前が記されるようになる。富士八湖や白糸ノ滝を一つの大きな絵にまとめることで、富士五湖周辺の情報を書き込めるようになった。



1920年代における中村式の展開



8.渡邊嘉十郎「富士吉田口全図」

個人蔵

大正13年（1924）8月1日印刷 同年8月5日発行

縦49.4 cm×横54.0 cm

「著作兼発行人」として「山梨県南都留郡上吉田六百四十二番地 渡邊嘉十郎」、「印刷人」として「東京市本郷区駒込神明町七十三番地 渡邊新一」とある。構図は中村月嶺「富士山北口全図」とほぼ同一であるが、吉田町の御師・旅館の名前が列挙されている点で、金子式の影響がみられる。



9.中村月嶺「富士山北口全図」

ふじさんミュージアム蔵

明治34年（1901）7月7日印刷 同年7月10日発行

本体：縦39.7 cm×横54.6 cm 袋：縦19.9 cm×横13.9 cm

昭和3年（1928）7月5日改正印刷 同年7月8日発行

中村月嶺の名で発行された「富士山北口全図」の中では最新のもの。中村は大正11年（1922）に没しており、別人により発行されたと考えられる。御師・旅館の名前が列挙されているのは、これ以前の中村月嶺「富士山北口全図」には見られない。袋裏面には昭和6年（1931）7月19日の日付を記した、御来光館（吉田口八合五勺の山小屋）の朱印が捺されている。



4 北口全図型案内図の終焉

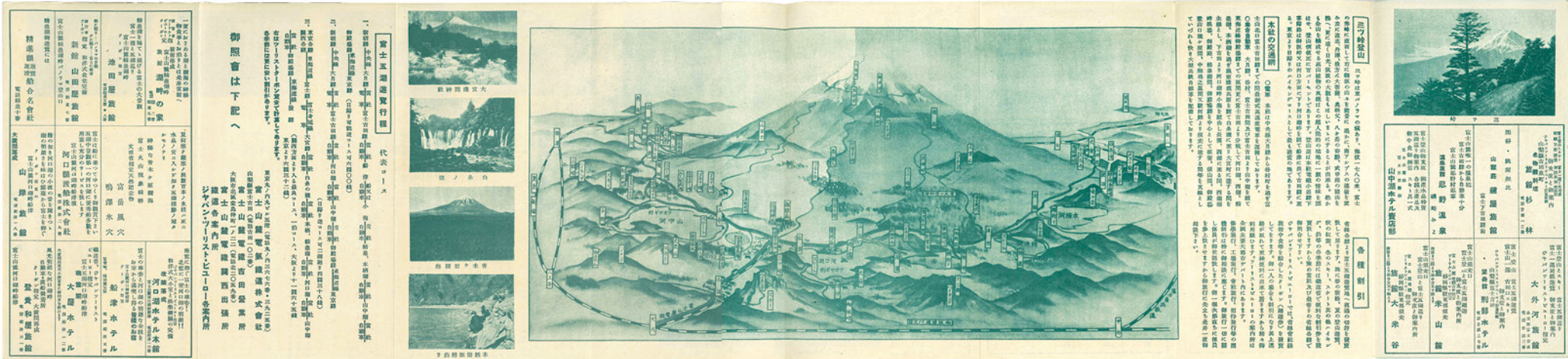
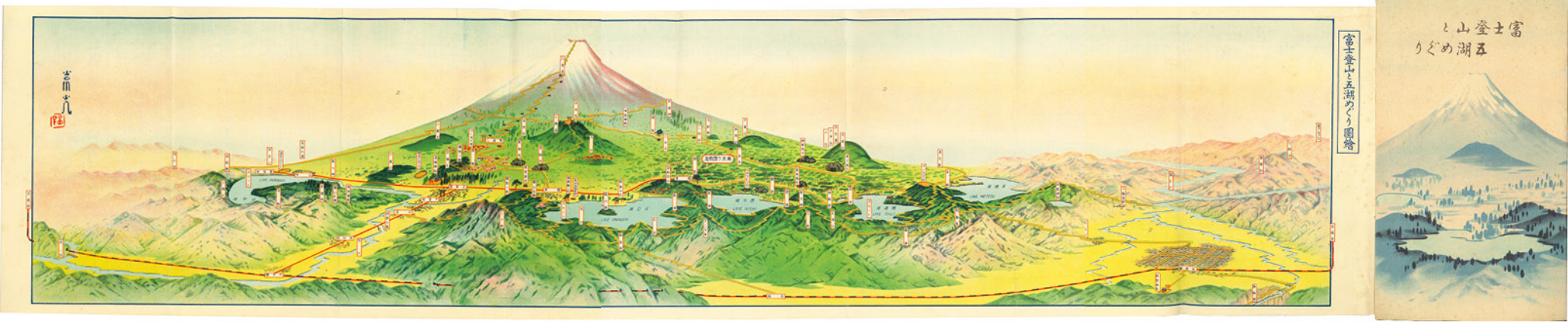
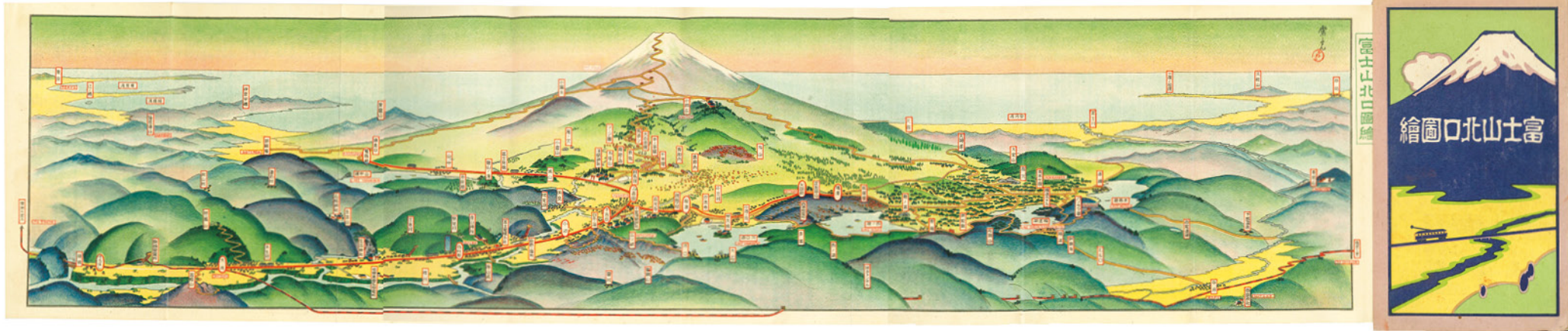
新しい鳥瞰図の登場と観光開発

1920年代（大正・昭和初期）における新しい鳥瞰図の登場

1920年代にはいと、北口全図型案内図とは異なる新しい構図で富士山北面を紹介する鳥瞰図が富士電気軌道・富士山麓電気鉄道といった鉄道会社や山梨県によって発行されるようになる。これらの鳥瞰図は、吉田口登山道・北口本宮富士浅間神社・吉田町を中心に描く北口全図型案内図と異なり、富士五湖とその周辺を横長に描写し、精進口登山道（大正12/1923年開削）などの新しい観光スポットを紹介する。北口全図型案内図が富士講の信仰世界を近代の旅行者に示したのに対し、新しい鳥瞰図は富士信仰とは関係ない非宗教的な観光地としての富士山と富士五湖を描いたものであるといえる。

富士山麓の観光開発の進展

このような新しい鳥瞰図の背景にあったのは、1920年代に進められた山梨県による富士山の観光開発である。大正14年（1925）には山梨県により交通機関の整備などを謳った「富士岳麓開発計画」が発表され、これに基づき翌年に富士山麓電気鉄道株式会社が創立される。このような富士山の観光開発は、富士山を信仰の対象としてではなく、避暑や風景の探勝といった近代的・非宗教的な観光地として捉えていたことに特徴がある。そしてこの開発を進めた山梨県や富士山麓電気鉄道が発行した鳥瞰図もまた、同様の認識を表現している。



12.金子常光「富士山北口図絵」
大正12年（1923）6月4日印刷 同年6月5日発行
縦17.9cm×横96.9 cm

裏面を見ると「発行所」が富士電気軌道株式会社、「印刷所」が日本名所図絵社印刷部と記載されている。富士電気軌道株式会社は、現在富士急行線が走っている大月－富士吉田（吉田町）間に大正10年（1921）から昭和4年（1929）まで電車を運行していた。富士山と富士五湖が東西に広く描かれている一方で、北口全図型案内図で中心的に描かれていた吉田町と北口本宮富士浅間神社が依然として絵図の中央に配置されている。

13.金子常光「富士登山と五湖めぐり」
昭和2年（1927）7月
縦18.6 cm×横99.9 cm

裏面を見ると「山梨県発行」、「日本名所図絵社製」とある。画面構成や裏面に富士山周辺の名所を詳細に記述する点は「富士山北口図絵」と類似している。その一方で、嘯山公園（現在の河口湖天上山公園）や富岳風穴、精進口登山道など、4年前の12.「富士山北口図絵」では描かれていないが現在も知られているスポットが紹介されるようになり、観光開発の進展を感じさせる。

14.富士山麓電気鉄道「国立公園 富士五湖」
昭和9年（1934）以降
縦17.5 cm×横76.5 cm

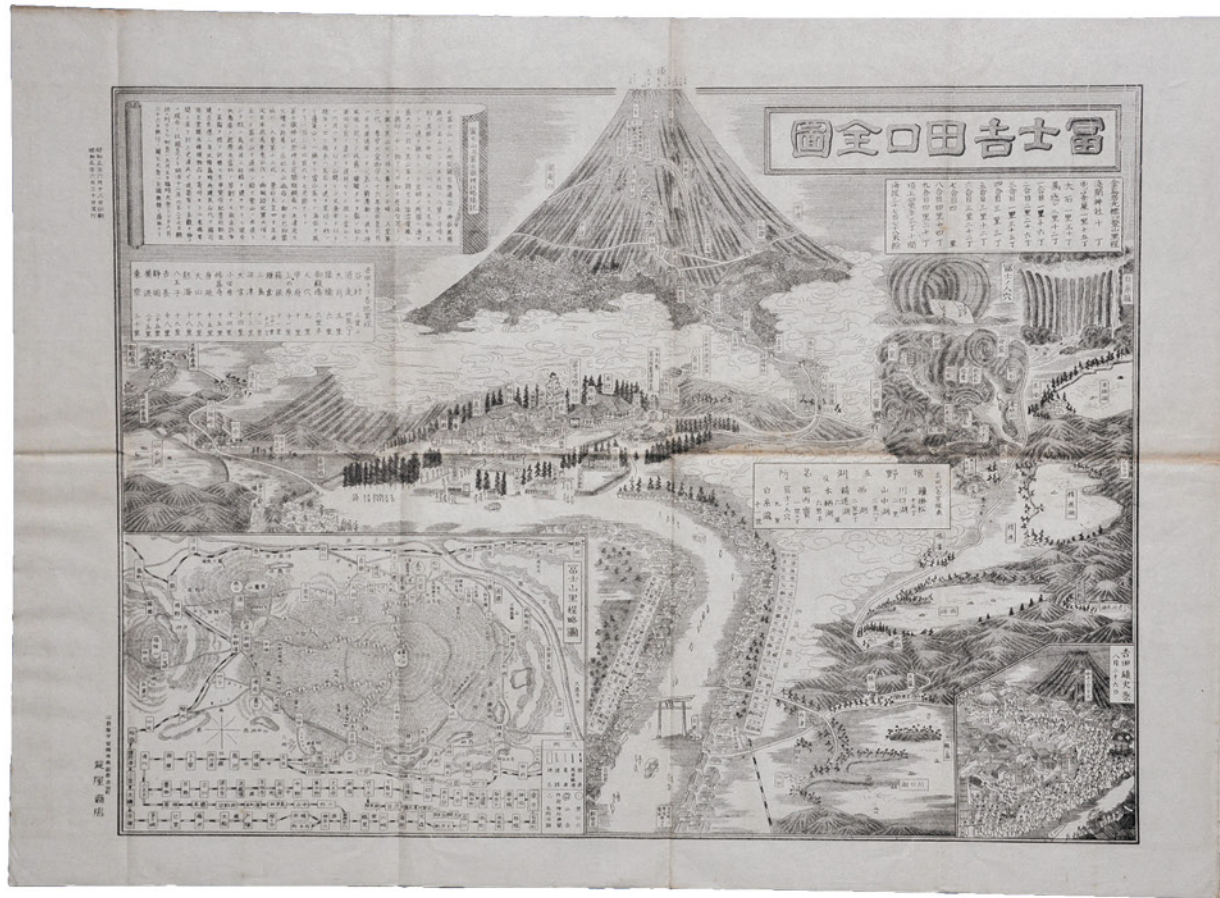
富士山麓電気鉄道株式会社が発行したパンフレット。同社は昭和4年（1929）に大月－富士吉田間で高速電車（現・富士急行線の一部）を開業したほか、富士山麓で乗合自動車を運行していた。本資料では、本栖一上井出間の自動車路線に触れられており、同路線が開業した昭和9年以降の作成と推定される。基本的な構図は上記「富士登山と五湖めぐり」を継承しているが、静岡県側についても描きこまれており、富士山麓一帯に展開した同社の事業の影響を感じさせる。

1930～40年代の北口全図型案内図：変容と終焉

昭和5年（1930）の北口全図型案内図にみる新しい鳥瞰図の影響

1920年代以降の山梨県による観光開発や新しい鳥瞰図の登場は、同時期以降の北口全図型案内図にも影響を与えた。

その具体例として、昭和5年（1930）に吉田の商店である錠屋商店が発行した北口全図型案内図である「富士吉田口全図」（以下「錠屋全図」）をみてみよう。大正12年（1923）の金子百太郎「富士山北口全図」（16頁下）では、「裾野八湖及名所」となっていた項目が錠屋全図では「裾野五湖及名所」に変化している。つまり錠屋全図はこれまで「裾野八湖」とされたものを「裾野五湖」と記しているのである。1920年代に登場した新しい鳥瞰図（18-19頁）には「（富士）五湖」の名称が多用されており、錠屋全図もその影響を受けたと考えられる。また、錠屋全図では、これまでの北口全図型案内図とは異なり精進湖付近に「パノラマ山」（パノラマ台）が記載されている。パノラマ台は1920年代以降の新しい鳥瞰図で紹介されており、錠屋全図もその影響を受けた可能性がある。



10. 錠屋商店「富士吉田口全図」

ふじさんミュージアム蔵
昭和5年（1930）6月18日印刷 同年6月30日発行
本体：縦39.7 cm×横 54.5 cm
袋：縦19.1 cm×横 12.9 cm

袋の裏には、吉田の御師である小澤達郎（屋号：うちわや）の名が記されており、北口全図型案内図は御師も販売していたことを示唆している。

（推定）最後の北口全図型案内図—昭和23年（1948）

昭和23年（1948）発行の「富士吉田口全図」は、おそらく最後の北口全図型案内図である。作成者の「山梨県富士上吉田町 案内会」は吉田町の観光案内所であったと考えられ、吉田町の紹介には北口全図型案内図が適切と判断された可能性がある。これ以降、北口全図型案内図は新たな発行が確認されず、事実的な終焉を迎えた。その原因については今後の検討を要するが、富士山中腹までの自動車の移動が容易になったことによる富士登山のスタイルの変容が影響したのかもしれない。



11. 山梨県富士上吉田町 案内会「富士吉田口全図」

昭和23年（1948）7月1日発行

個人蔵

縦37.6 cm×横52.4 cm

「印刷所」として「株式会社日本写真巧芸社」の名が記載されている。前頁の錠屋商店「富士吉田口全図」と同様、「裾野五湖」が記載されるなど1920年代以降の観光開発の影響が見受けられる。

おわりに：世界遺産・富士山からみた北口全図型案内図の意味

富士山は平成25年（2013）に「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産に登録された。世界遺産としての富士山を未来に残していくためには、信仰の山としての富士山をわかりやすい形で多くの人に伝える必要がある。このミッションを20世紀前半に達成していたのが、本展で紹介した北口全図型案内図だったのではないのだろうか。

北口全図型案内図はその端緒である「富士山北口全図」（明治34/1901年）の作者が富士講員だったことが示すように、富士信仰の世界観を表現したガイドマップだった。また、北口全図型案内図が昭和23年（1948）まで繰り返し発行されたことは、富士山が信仰の山であることが当時の旅行者一般に広く受け入れられてきたことを物語っている。

北口全図型案内図の成立から終焉までの歴史は、世界遺産・富士山の継承を考えるうえで多くの示唆を与えてくれるものであり、研究の深化が期待される。

